

特定非営利活動法人 日本免疫学会  
平成 23 年度 Tadamitsu Kishimoto International Travel Award  
研究発表報告書

申請者氏名	米谷耕平	会員番号	0023547
申請者の所属・職名	理化学研究所 免疫・アレルギー科学総合研究センター 分化制御研究グループ 研究員		
出席会議名	2011 Keystone Symposia (B cells: new Insights into Normal versus Dysregulated Function)		
発表論文タイトル	CIN85 regulates the canonical NF- $\kappa$ B pathway and subsequent B cell responses		

実施結果:

私が参加しました 2011 Keystone symposia (B cells: new Insights into Normal versus Dysregulated Function)は 2011 年 4 月 12 日～17 日の期間で、カナダの Whistler にて開催されました。本会議はほぼ毎日(初日や最終日を除く)、午前中にシンポジウム形式の公演、午後は昼食後から夕方(12:30-16:30)までワークショップ、その後夜まで(17:00-19:00)再びシンポジウムが開かれ、最後に 19:30-22:00 までポスターセッションという濃密なスケジュールで行なわれました。対象とされる分野は、B 細胞の発生、活性化機構、胚中心反応から記憶 B 細胞の機能といった B 細胞の一生をほぼ網羅した基礎的な分野のみならず、本会議の副タイトルからも分かる通り、リンパ腫、白血病の発症メカニズム、自己免疫疾患を始めとしたヒト B 細胞疾患の治療法開発といった応用的な分野も含まれており、B 細胞の研究分野のほぼ全てが扱われていました。私個人は、現在基礎分野の研究に重点的に取り組んでいるため、なかなか応用的なところまで行なえていないのが実情ですが、本会議では応用面の重要性を再認識させてくれたことはもちろんのこと、治療に繋がる最近の動向や最新の知見などの各種情報を入手できたという点でも大きな意味がありました。内容に関して少し詳しく報告させて頂くと、本会議では IL-10 産生 B 細胞など近年注目されてきている抑制性 B 細胞を対象とした発表が数多くあり、基礎的な研究であっても応用に繋がる可能性の高いものが注目されていました。また、DNA やヒストン修飾といった B 細胞の新たな制御機構や、さらには ChIP-seq など近年広まってきている技術を用い、それらを網羅的に解析している発表が多かった点が個人的には強く印象に残りました。また、昨今の情勢を反映してか、ウイルス感染に対する B 細胞の応答、B 細胞側からみた治療への貢献といった発表も印象に残りました。それ以外にももちろん、私自身が取り組んでおり、なじみの深い研究分野であります B 細胞の活性化機構やその後の運命決定といった内容でも数多くの発表がなされており、それらの発表者の公演をシンポジウム、ワークショップで聴くのみならず、ポスター会場で直接ディスカッションできたことは大変有意義でした。また、そのなかの何人かの研究者とは会議終了後もやり取りをすることで研究上のアドバイスを頂けたり、実験材料を提供してもらうことができ、これは本会議に参加することで初めてなし得たことであり、本会議での大きな収穫の一つです。以上の様に、本会議は B 細胞研究を行なう上で、最新の知見を得ることはもちろんのこと、多くの研究者との交わりにより新たな人脈形成をもたらすなど、遠い地での開催ではありましたが、Tadamitsu Kishimoto International Travel Award により参加させて頂くにふさわしい内容であったことを報告させていただきます。また最後となりましたが、感謝の言葉を記させていただきます。